

## イギリスでパソコンと向き合う日々

受入機関：欧州バイオインフォマティクス研究所 (European Bioinformatics Institute : EBI)

派遣期間：2012.7.28～2012.9.25

私は組織的な若手研究者等海外派遣プログラムの支援を受け、イギリスにあるバイオインフォマティクス研究所 EMBL-EBI (European Bioinformatics Institute) に滞在しました。

滞在中は主にデータ解析の手法を学びました。渡航前は、「本当に自分にできるのだろうか?」という不安でいっぱいでしたが、実際にやってみると非常に面白く、その魅力にどっぷりとつかった2ヶ月間となりました。

今回の滞在中で、自身の実験に必要な解析手法が学べたことは大きな成果となりましたが、それに加えて、有益なデータベースを整備している方々の活動を目の当たりにできたことも、本当に貴重な経験となりました。

今では、当たり前のように、デスクに居ながら読みたい論文をダウンロードしたり、Web 経由で論文投稿や学会の参加登録ができますが、昔は、ほぼアナログの作業でした。学部学生の頃、自転車をこいで医学部図書館まで向かい、大量の蔵書の中から目的論文が載っている本を探して各階を徘徊し、台車に何冊も蔵書を集めてコピーをしたことが懐かしく思い出されます。最近では、たいていのことが Web を通じて行えるので、「便利な世の中になったなあ」くらいに暢気に構えていましたが、論文検索や遺伝子・タンパク質配列情報の取得など、自身の研究を進めるために行ってきたことの数々は、情報系研究者の皆さんの活動の賜物なのだと思えることができ、本当に頭が下がりました。

ドライ系、ウェット系として区別される情報系、実験系の両分野ですが、両方に精通した研究者はまだまだ少ないようです。双方とも、その全てを理解し合うのは困難だとは思いますが、データの意味付けをよりの確に行うには、生データから正確に必要な情報を抽出してくる情報系の能力と、それを解釈し意味付けを行う生物学的知識が必要で、両方に精通している人は圧倒的に深い洞察を行うことができると感じました。今回中心となって指導して下さった先生はウェット系からドライ系に転向した方で、実験プランについてもアドバイスして下さいなど、私にとってとてもラッキーな環境が整っていました。

今後、扱う生物データが大規模になってくるに伴い、得られる情報もデータベースも本格的に整備されると思われます。こういったデータベースを適切に使える知識を持ち、アンテナを張り続けて自身の知識もアップデートしていかないと、確実に取り残される、と身が引き締まる思いがしました。

最後になりましたが、本派遣事業において、ご支援いただきました先生方やスタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。



EBI 外観



(←)DNAらせん構造を模した階段。各ステップには、過去から現在に至る遺伝生物学研究の偉業が記されている。

These steps show a selection of achievements of the researchers...



(↑)「The Human Genome Project Begins :1990」  
(下から8段目)